

中国における教育課題と展望

田 中 圭治郎

[抄 録]

現在、中国においては若者の高学歴への志向が強く、高等教育機関への進学率が高くなりその結果、高等教育を修了した彼らが希望する職業に就くことが困難な状況となっている。そのため、中国政府は受験中心の競争重視の応試入試を改め、個人の能力や個性を尊重する素質教育を推進しているが、人々の高学歴を求める現状から必ずしも成果を上げているとは言えない。本稿では、中国の教育思想のルーツを辛亥革命、中華民国及び中華人民共和国時代にそれぞれ活躍した蔡元培、徐特立と顧明遠の教育思想の中に見出し、その後これらの思想が現在までどのような変遷を辿って来て、将来どのようなようになるのかについて考察する。この流れは、明治以降教育の西欧化の道を辿った日本の教育思想と類似性を持ち、時として重複するであろう。教育の現象は、現在の事象を見るだけでは解明できず、歴史・民族文化の背景の中で考える必要がある。諸外国の様々な教育実践を自国の中に取り込もうとする時に様々な摩擦が生じる。時としてそれは、保守と改革、国粋派と国際派の対立に繋がり、理念的な不毛な論争に終わってしまう。近代中国の教育の先達どのように自国の教育改革を考えてきたのかを考察し、さらにそれが現在どのようなようになってきたのかを現地調査を踏まえて論ずる。

キーワード：中国の教育，素質教育，教育格差，蔡元培，徐特立，顧明遠

第1章 近代中国の教育思想の原点

第1節 蔡元培と徐特立の教育観

〈蔡元培〉

蔡元培は、1868年浙江省で生まれ、24歳の時、清朝時代の科挙の最終試験「殿試」に合格し、26歳の若さで「朝翁林院編集」というポストを清朝から与えられた。この年は、日清戦争で日本に敗れた年でもあった。彼は、遅れた中国の改革のために西欧の書物を読みあさり、それらを中国語に翻訳し、人々の啓蒙に努めようとする。当時、日本で多くの西欧の書物が日本語に翻訳され、それらにより日本の改革が試みられていることを知り、西欧の書物の日

本語訳を中国語に翻訳することの必要性を痛感した。ドイツ留学中の1911年に辛亥革命が起こったため、急いで帰国し、中華民国臨時政府教育総長（文部大臣）になり、さらにフランスに留学した後、北京大学の大学長等々の要職を務め、後に「中華民国教育の父」と呼ばれるようになる。彼は、欧米教育思想を積極的に取り入れることにより、自国の教育改革を図ろうとした、

次に、彼の言葉を引用することにより、当時の中国の教育事情を考察する。

「われわれ中国人にはこれまである悪弊がありました。尊大ぶること、およびその裏返しとしての自棄がそれです。尊大ぶった人は、保守心が強く、わが中国の四千年文化は外国の及ばないものであり、外国の法制は取るに足らないものである、と自負しています。ところが、何度かの敗戦をへて、こうした尊大さは外国人崇拜へと転じ、ことごとく外国を基準に考える風潮が現れました。やりたいことがあれば『○○国でやっているから』と言い、やりたくないことは『○○国でもまだやっていないことを、わが国でやれるはずがない』と言うのです。こうした言い方は、評論家の間の口頭禪[口癖]になっている感があります。これまでの尊大さが自棄に変わったのです」(注1)

この当時、外国との戦いに破れ、中国の人々がどのように教育改革をすればよいかについて迷いが感じられる。さらに彼は、次のように述べている。

「現在のわが国の教育規定は、日本をお手本としたものが甚だ多いのですが、このことはわれわれのなごりさを示しているわけではありません。日本の学制も、もとはヨーロッパ各国をお手本としていたことを、私たちは知っています。ただヨーロッパ各国の学制の多くは、歴史的に徐々に進化しつつ成立したもので、整然とした画一的なものではなく、またそこには西洋人独特の慣習も含まれています。そこで日本は、維新後に創設した学制を、西洋各国の制度を取り入れつつ折衷していったのです。ですから、日本をお手本とすることは、とりわけ適切であります。とは言っても、日本とわが国では国体が異なっていますので、欧米に適切な制度があればこれも採用せねばなりません。また、たとえ日本や欧米各国で実施されていないものであっても、教育家が現に提唱しているものについては、われらも採用して実施してみてもよいのです。われらが原理的に観察して、実施可能となれば実施すればよいのでして、われらに先立って実施している国がなくても構いません」(注2)

彼は、中国の独自の文化の中に、どのように西欧の文物を取り入れたらよいかを模索する当時の日本の「和魂洋才」の方策をまねることの必要性を主張する。すなわち、技術は西欧のものを採用するが、精神は自文化を維持することである。

彼は、1912年7月全国臨時教育会議の中で、「かつてスイスの教育家ペスタロッチーは、

以前の教育では児童が成人に教えるものであったが、現在の教育では成人が児童に教えるものであると言いました。・・・成人はどうしても先入観を持っているので、児童の身になって体験しつつ、教育の方法を定めるべきことを言っているのです」と述べ、西欧の文物を積極的に取り入れることの大切さを主張する。彼は、「計画性のある運動」として、次の5つの項目を強調している。

一 自発的に学習すること

学校では、教科書や教官に頼ってばかりではだめです。教室の授業は、大切ではありますが、自発的に自習する中で、学習への糸口や学問に対する興味を自分で発見するよういつか心がけることの方がもっと大切であります。

二 自分で自己の行為を管理すること

学生は社会に対して、既に指導的地位にあります。よって、よく気をつけて自己の行為を管理せねばなりません。教職員に管理されるのは嫌いなくせに、自分とはいうと全くわがままで悪いことばかりしでかしている学生も、一部にいるようです。人に管理されないで、自分で治められるのが良いのでありまして、自分は放縦でも管理は嫌いだというのは、良くありません。管理規則や教室規則などは、無くしても構いませんが、自分で秩序を守ることができなくてはなりません。規則をなくしても、その効果は、規則があった時と同様かそれ以上でなくてはなりません。民主主義とは、秩序を守らないことではありません。最も力を入れて「自由」を主張しているラッセル氏もまた、「自由」と「秩序」は相反したものではないと言っています。最も良いのは、学生が自発的に規則を定め、自ら遵守していくことだというのが、私の考えです。

三 平等及び労働の観念を持つこと

ある友人が私に言うことには、「学生たちは、教職員との平等を公然と要求してくるくせに、使役している雑役夫に対しては、怒ったような目つきで睨むなど、まるで主人面をして、奴隷扱いだ」と。これは、以前の学生を指した発言ではありますが、まず先に学生たちは、雑役夫やそのほか自分たちより知識の少ない人々との平等の方法を講じるべきです。そうして後は、教職員に不平等な扱いをされそうになったら、それに応じなくてもいいでしょう。最近働きながら学ぶという勤工儉学が盛んに叫ばれています。学内での仕事は、学生自身にやらせてもいいと私は思います。一日中勉強ばかりでは、健康上も良くありません。およそ飯を食うだけで何もせず、天から与えられた物を浪費するばかりの人というのが、私たちは最も嫌いです。かつてトルストイも汎労働主義を唱えていました。彼は、自分で衣服や履物をつくり、自ら農作業をして、厳密すぎる分業に反対しました。私は、学生もこうしたことに留意してほしいと望んでいます。

四 美の楽しみに注意を払うこと

最近の学生の多くは、麻雀やポーカー、劣悪な小説にふけるなど、不健全な遊びをしてい

ます。その原因は、もともとそうした学生は学問を好まないことによりますが、社会や学校に健全な遊びがないのも、主な原因です。甚だしきは、生きがいなくなり、心にたより安んじるものもなく、自殺する者さえいます。そこで私たちは、早急に美育を提唱して、人生を美化し、人の魂を美に托して、憂いを忘れさせていくことが大切です。学校の中で実現できるものには、音楽、絵画、旅行、遊戯、演劇などがあり、良くない遊びにかわってこれらを行うことが出来ます。

五 社会奉仕

社会一般の知識水準が進歩しなければ、各種事業の施策練る上でも、苦痛を感じます。五四以来、学生が平民学校をたくさんつくって失学の人に一般知識や職業知識を教えています。これは素晴らしいことです。北京では一校で二～三百人収容しているものから、千人も収容しているものまであります。それらを見て私は、たいへん楽観的になりました。これを国がやろうとすれば、人材的にも財政的にも困難があります。だが、平民学校は特別な人材もお金も使わずに、大きな教育効果をあげることが出来ます。それ故に素晴らしいのです。そのほか講演の形式で平民に知識を与える平民講演も素晴らしいことです。また、社会状態の調査も甚だ大切なことです。わが国には統計がないので、諸事を計画するにも基礎となる根拠がありません。民主主義を語り、真の大衆運動を追求したいのなら、各種の細かい調査からはじめるべきです」(注3)

これらの論旨は、西欧の思想を紹介したものであり、中華民国の教育改革・教育思想の基本方針である。彼の文言の中には、外国の文物を謙虚に学ぶ、良いものを評価し、それを自国にどのように生かすかという情熱が感じられる。

〈徐特立〉

徐特立は、1877年に湖南省で生まれた。近くの私塾で学んだ後、貧困のため独学で学ぶ。28歳で長沙の寧郷師範学堂に入学した。この師範学堂（師範学校）の教師は、全て日本で4か月間研修を受けた者たちであり、徐は彼らから教授法や学校運営の方法を学んだ。1911年に辛亥革命が起ると、各地に出来た師範学校の運営に参画する。1913年から1919年まで湖南省第一師範学校の教師時代に教えたのが毛沢東であり、以後彼との関係は続く。徐は、その後フランスに4年間留学し、ドイツ・ベルギーの教育の視察を行った。彼は、当時中国で一世を風靡していた、アメリカのプラグマティズムの影響を受けることはなかった。当時の中国は、清朝末期の日本の影響から脱し、ジョーン・デューイ、キルバトリック、ポール・モンロー等のアメリカの教育の影響を受け、ドルトン・プラン、ゲーリー・システムなどの教授法が積極的に受け入れられていた。1927年、国共合作が崩壊すると、彼は共産党に入党し、各地で国民党との転戦の後、ソ連に行き、マルクス・レーニン主義の理念を学ぶ。1949年、中華人民共和国成立後、党中央委員の要職に就き、新国家の教育建設に貢献した。

1942年3月15日の『解放日報』に掲載された彼の論文を見る。

「医薬や古い書であれ、宗教経典や社会矯正のための文書であれ、科学的な意義はないにしても歴史的な意義はあるものである。ましてやブルジョア学者及びブルジョア社会のあらゆる中間階層の学説となれば、唯心論や機械論、及びその他の反動的な要素を含むことは免れないにしても、多くの貴重なものをもっているものである。とりわけ自然科学や技術の面では、われわれはとくに彼らを尊重する必要がある。技術人材が政治的に遅れているといった先入観は、実は自らの心の狭さやうぬぼれの表れに他ならない。われわれは虚心に学び、深く研究する必要がある。本当にこのように学ぶことができれば、どのような種類の書物を読むにしても、必ず自分ではこれまで分らなかった事柄を発見するはずである」(注4)

社会主義者である彼は、マルクスの思想の下で、科学的・実践的な教育を志向する。さらに、

「学科[理論的分野]と術科[技術的分野]は相伴って発展し、相互に転化し、相互に援助し合うものである。あらゆる生活、あらゆる行動は当然のことにとどまるのではなく、なぜそうなのかを理解する必要がある。あらゆる知識や技術は頭による分析と集団による討論を通じ、あわせて手による試行を経て一定の効果を得なければならない。これは即ち、学科と術科が密接に協力し、頭と手が密接に協力することである。反対に、一方だけに向って発展すれば、半身不随の、奇形的に発達した国民を作ってしまう。あらゆる奇形的な発達は、発達の可能性を失うことになるはずである。いかなる高尚で深遠な理論も、その中には常識の部分があり、難解だと恐れるべきではない。その理論と学習者の生活とが直接あるいは間接に結びついてさえすれば、何ら神秘的なことなどなくなってしまう」(注5)

と述べ、理論と実践との融合を求めている。また、教育に関しても

「教育で最も良いのは、実際に実物の観察から手をつけることである。それはつまり、郷土や学校周辺の事物を一般の教科書の中に採り入れ、教科書と学習者の生活を結びつけ、学習者が教科書に対する批判を行ない、削ったり、補充したりできるようにすることである。こうした教え方であれば、非常に悪い教科書でも使うことができる。なぜならば、それはちょうど教える者と学ぶ者に共通の批判材料を提供することになり、反面教材として知恵の源泉を刺激することになるからである。」(注6)

彼は、中華人民共和国の教科書の編纂に尽力しており、新中国の教育内容に大きくコミットしているのが、生活の中からの学習は、ソ連のポリテクニズムの影響を受けていることがわかる。

彼は、抗日戦争を戦い抜き、マルクス・レーニンの教育を中国に導入したのであるが、中国独自の文化の中でそれをどう活用するかを忘れなかったのである。1942年4月1日の『解

放日報』の彼の論文は、興味深いので引用する。

「陶行知は、中国の教育家であることは誰でもみな知っている。しかし、大部分の人は彼が『教[教えること]、学[学ぶこと]、做[行なうこと]の合一』を提唱し、小先生制を考案したことを知っているだけで、彼が反主観主義の極めて優れた模範であることは知らない。彼は自己満足することがなかったが故に、子供の天賦の才能を見つけ出し、子供はおとなの先生であること、即ち、韓愈の言った『弟子必ずしも師に如からずんばならず（学生が先生より優れていてもよい）、師必ずしも弟子より賢ならず』ということを発見することができたのだ。陶行知はもと知行と号していたが、ある日、自分の根本的な誤まり、つまり知ることを第一に置き、行なうことを第二に置いていたことに気づくや、早速、自分の名前を逆さまにして行知と改称し、それとともに自己の一生の行動を改めて、自己を否定し、自己に反対したのである。わが同志諸氏がこのような精神を何時もちあわせたかについて、どうか各々自ら点検してみしてほしい。陶行知はマルクス・レーニン主義者ではなく、ボルシェビキとも違う。救国会の責任者の一人である。同志の皆さん、救国会の先生方は見倣うに値しないかどうか、われわれ一人ひとりが点検してみようではないか。陶行知の先生はデューイであり、われわれの先生はマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンである。デューイの下に陶行知が生まれた。デューイは、陶にわずかな金を与えただけだが、陶はなんとそれを元手に豪商になったのだ。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンはわれわれに多くの財産を与えてくれたが、われわれはいまだにそれを十分に使いこなすことができず、さらにセクト主義、主観主義を生み出してしまっている。とりわけ由々しいことは、彼ら先達の弁証法的唯物論を、われわれは新約・旧約聖書、コーラン、及び『南無阿弥陀仏』のお経に変えてしまっていることだ。同志の皆さん、なお高ぶるに足りるかどうかが、自らを点検してみようではないか」（注7）

彼は、さらに続けて、

「江蘇省の愈子夷先生は日本の宏鴻文訓練班の学生であり、彼の学んだ時間は半年足らずであったが、彼は中国教育界で極めて大きな貢献をしたのである」（注8）

宏鴻文訓練班とは、1902年、嘉納治五郎によって創設された中国人留学生に速成教育を施すための特設教育機関「宏（弘）文学院」のことであり、反日の考え方の彼がこのように述べているのは興味深い。

「日本では明治維新の初め頃、書物の欠乏は驚くべきものであった。その頃の有名な教育家であった福沢諭吉は、オランダ語を学ぶのに、先生を捜すのが容易でなかったばかりか、

本を捜すのも容易ではなかった。百里ばかり離れたところに住むある人がオランダ語辞典を持っていることを聞き知ると、彼は弁当、荷物をさげて出かけ、その辞典を写させてもらったのである。」(注9)

このように、第二次世界大戦終了後でも敵であった日本人の行動を賞賛している彼の考え方の中には、自分の国の教育に役に立つものであれば、積極的に受け入れ、ソ連のマルクス・レーニンの考え方をそのまま中国に移植するのではなく、中国の文化に合致した中国独自の教育を作り出そうとする意欲が汲み取れる。

第2節 顧明遠の教育思想

顧明遠は、現在中国教育学会会長であり、北京師範大学の教授であり、中国教育界の重鎮である。彼は、1951年から5年間ソ連のレーニン師範学校で学び、中国の教育界に多大な影響力を及ぼした人物である。彼の思想の中で、現在の中国の教育思想を考察する。

「中国の現代教育制度は、西洋の教育制度を導入することによって発展してきたので、自然に多くの西洋の文化や思想が染み込んでいる。100年以上前からわれわれは多くの西洋国家の教育思想の学派を受け入れ、吸収してきた。ここ20年間、さらにさまざまな教育思想がどんどん押し寄せてきている。それらをどのように借用、吸収し、中国化、内在化して中国教育の伝統とするかは、真摯に検討するに値する課題である。我々は西洋中心主義、すなわち西洋の全てが良く、現代化とは西洋化であり、中国は全て西洋化することによって活路が見いだせるという考え方に反対する。歴史が証明しているように、そうした道には活路はない。中国の国情を考慮した自分の道を歩むことによるのみ中華民族の利益に合った現代化を真に実現することができるのである。教育も同様であり、外国の先進的な教育制度や経験を学ぶには、それを中国教育の伝統と結合することによってのみ、実際の効果を得ることができるのである。……当然、植民地主義時代の文化交流は一方通行的なものであり、植民者が強権的に彼らの文化を押し広め、土着の文化の消滅を企てたので、植民地国家とその民族の抵抗を受けることになった。感情的にはこの点は理解できることである。しかし、理性的に考えれば、植民地となったからといって一切の外国文化を拒絶することは愚かであるだけでなく、有害でもある」(注10)

顧の考え方も蔡や徐の流れを汲むものであり、文化対革命後の排外主義を経験しても、いや経験した後だからこそ、諸外国の良いものを取り入れ、自国の文化と如何に融合させるかの必要性を痛感しているのがわかる。

彼は、素質教育について次のように述べている。

「生徒の能力を養うには、生徒を授業の過程で主体的地位におくことが必要である。授業中は生徒の積極的な主体性を十分に引き出し、生徒が自主的に学習する場を残しておく必要がある。現在、中国の新しい教育課程改革では生徒の学習における主体性が強調され、探究的学習が重視されている。しかし、教師の授業観が変わらなければ教育課程改革も成功を収めるのは難しい。

また、何が質の高い授業であるのかという問題もある。知識は多ければ多いほど良いのか、試験の点数は高ければ高いほどよく授業の質も高いと言えるのか。現代の教育は、生徒の能力の向上ということをより重視している。こうした能力には問題を発見し、提起し、分析し、解決する能力が含まれ、さらに継続して学習する能力、表現する能力、人と交わる能力、組織する能力も含まれている。1960年代にアメリカの教育学者のブルナーが『教育の過程』で述べているように、『教育の最も一般的な目的は優秀性（エクセレンス）を育てることではないかと思われる。だが、この言葉がどんな意味で使われているかを明らかにしなければならない。ここで言っているのは、優れた生徒に学校教育を与えるだけではなく、一人一人の生徒が、各自に最も適した知的発達を遂げるように助けてやることである』。現在、科学技術は急速に発展してきており、知識は日進月歩の勢いで変化してきている。学校教育のわずか数年間では、人類が蓄えてきたあらゆる知識を生徒に十分に伝えることはできず、またその必要もない。それより重要なのは生徒にどのように学習するのかを教えることである。授業の質の高さは、生徒の知力の発達に基づいて評価されるべきなのである

全面的な教育の質に関する観点とは、教育方針を貫徹し、生徒の徳育、知育、体育、美育の諸方面のいずれをも生き生きと活発かつ主体的に発達させることである。全面的な発達とは、生徒が全ての科目で優秀であることを求めることではない。これは、生徒の成長の法則に合致していない。というのも、人にはそれぞれ差異があるからである。生徒にあらゆる強化で優秀であることを要求すれば、必然的にその生徒の他の特別な興味や才能を押え込むことになる。こうした基準を生徒に当てはめようとすれば卓越した人材を養成することは出来ないのである。」（注11）

このように彼は、素質教育の理念を、アメリカのブルナーの教育の思想を引用することにより、説明している。彼の考え方は、中国の教育家の伝統を引き継いだものと言えよう。

第2章 文化大革命以降の教育

第1節 応試教育から素質教育へ

1966年から1976年までの文化大革命期は、学校現場は大きな混乱が生じた。革命思想を優先した結果、北京大学の入学者の学力は前期中等教育の生徒の学力しかなかったと言われ

ている。このような学校教育を再建すべく、中国は1978年以降学校教育の質の向上に着手した。「四つの現代化」の1つに「科学技術の現代化」を掲げて、特に自然科学分野の教育研究の充実を重視するとともに、1986年には「中華人民共和国義務教育法」を成立させて9年間の義務教育の普及を図っていった。高学歴や質の高い教育がその後の就職や高収入に有利という認識が浸透するとともに、評価の高い上級学校へ入学させようとする保護者と、保護者の期待に応えようとする学校・教師により受験教育（応試教育と呼ばれている）は、都市部を中心に急速に広がっていく。

「知識の詰め込みと丸暗記」という受験を重視する教育は、創造力豊かな21世紀に求められる人材養成に合致することが出来なくなってくる。すなわち、受験型の人間では、新しい時代のテクノロジー・経済知識に対応できないことがわかってきた。

1993年2月、中国共産党中央と国務院は「中国教育改革及発展綱要」を発表し、「全面的に（小中高生を含む）学生 の 思想 道 徳、文化 知 識、科学 技 術、労働 技 能や身体・心理 素 質を高める教育へと転換し、子どもたちの生き生きとした活発な発達を促すべきである」と述べて、素質教育を学校教育の最大の目標に置くことを求めた。素質教育とは、具体的には道徳素質教育、知力・能力素質教育、心理素質教育、審美素質教育、身体素質教育、労働素質教育から構成された総合的な概念である。

2001年から公布された「全日制義務教育歴史課程標準」や「全日制普通高中歴史課程標準」（実験改訂版）など、一連の歴史教育課程標準は、1996年に国家教育委員会が制定したものを改訂したものであり、それ以前の歴史教育の教育大綱に比べて、この歴史課程標準には次のようないくつか新しい進展があった。

- ① 歴史教育の全体の目標が更に全面的になった。そのことは、“歴史教育を通して、生徒に人類社会の発展の過程を理解させ、歴史の角度から人と人、人と社会、人と自然の関係を理解し、歴史の中から知恵をくみ取って、人文の素養を高め、正しい人生観と価値観を形成して、モラル、知恵、体育、芸術、労働といった全面的に発展する高素質の公民になること”という記述にも現れている。
- ② 思想教育の目標の内容が多様化した。“愛国主義の教育”と“民族団結と祖国統一の教育”を引き続き強調するだけでなく、歴史課程標準の中にはいくつかの新しい提案が現れた。例えば、“生徒にいっそう唯物史観を運用させ、社会の歴史に対して観察と思考を行わせ、徐々に正しい歴史意識を形成させる”とか、生徒に“国情の教育”を行い、生徒に“中国の特色ある社会主義を建設する信念と改革開放、中国を振興する使命感”を持たせるとか、“生徒を導いて正しい国際意識を形成し、積極的に国際協力と国際競争に参加する意識を強め、生徒に人類の伝統的美徳を受け継がせて、正しい道徳の観念と人生観、価値観を初歩的に形成させ、健全な人格を形成して、社会の発展に必要な公民の意識と人文の素養を育成する”とかである。

- ③ 生徒の能力育成の原則が十分に強調された。素質の教育を出発点にして、歴史教育の課程を生徒が能動的になる学習課程に転換した。歴史課程標準では能力、特に創造精神と実践の能力の育成に焦点が絞られた。従来の大綱と比べて、新しい歴史課程標準は能力の育成について、更に具体的な目標を打ち出した。
- ④ 歴史教科書の改革の目的を明確化した。それはつまり、生徒の負担を軽くし、特に生徒の記憶の負担を軽減させることにある。生徒に最も重要な地名、人名、年代、数字と語句だけを覚えさせ、彼らを重い記憶の負担から解放して、その時間と労力を分析や思考に集中させ、生徒の知能を高めるべきであるとした。教師の意識的な指導を通じて、歴史教育が出来るだけ現実の生活と時事と結び付くようにし、“歴史を通じてもっと良く現実を知り、現実を通じて歴史に対する理解をもっと深める” 目的に達することである。
- ⑤ 歴史課程標準は、最新の歴史学研究成果を積極的に取り入れ、歴史の内容を豊かにすることを重視している。教材の内容において改訂大綱はできるだけ史学界で公認された新しい成果を吸収している。各歴史の時期や時代に対する叙述や歴史事件と人物の評価についてもいっそう客観的になった。（注 12）

このように、素質教育は応試教育に比べ、より創造的な人材養成を意図するものであった。これまで中国は、安価な賃金で、安価な製品を世界中に供給することを主目的としていたが、少子化や将来の高齢化の招来を控え、より質の高い製品を生み出す技術力を養成することが痛感されてくる。従来欧米や日本の技術に依存するのではなく、より新しい高度な技術を中国自身で生み出し、技術力で世界をリードすることが求められる。

「学習者主体」の教育を導入することにより、学習者の興味・関心を引きだし、情報化・国際化に対応する必要性に迫られてきたのである。

しかしながら、従来の応試教育の考えを持つ保護者や教師たちは、私塾（学習塾）を中心とする補習教育をより一層強化している。また、都市部と農村部の教育格差は縮まるどころかより拡大している。豊かな都市住民の子どもより激しい受験競争は、素質教育が骨抜き状態であると指摘されてももっともであると言えよう。世界に通じる人材養成、すなわち世界でもトップクラスの人材を養成する高等教育機関が存在する反面、農民の子どもたちが通う農民工学校が存在するのも中国の教育の特徴と言える。

第2節 市場経済の導入と教育

1976年に文化大革命が終息し、共産党内の権力闘争を経て、登小平が権力の奪取に成功する。そして、1978年の第11期3中全会で、「四つの近代化」が謳われるようになるが、これは1984年の第12期3中全会の「経済体制改革に関する決定」によって市場経済化が起こる、その先駆的な政治的意思決定である。

文化大革命中に教育は荒廃し、小・中学校の基礎教育の欠如、高等教育の世界的潮流からの脱落により、中国経済は大きな後れを生じるようになる。特に、日本の経済的成長、後には韓国や台湾のそれが中国共産党の指導部に大きな危機意識を抱かせることとなる。

このような状況下で、登小平は先富論という考え方を提案する。先富論とは、最終的にみんなが平等になれば良いので、最初に平等を求める必要はない。みんなが豊かになる理想に近づくためには、先に富めることが出来る者を富ませれば良いのだといった考え方である。国力を増強するためには、まずは能力に応じて収入を得る社会主義を目指すべきであって、その過程で少々の格差が生じて仕方がない。生産力が高まる中でこうした格差は、早晩なくなっていくはずだ—先富論は、このような考え方の下に成立したのである。

このような考え方により、教育政策も大幅な修正が求められる。そこで中国当局が参考にしたのが日本のマンパワーポリシーであった。当時の日本は、アメリカの教育の現代化の影響の下で、人材資源の活用を目指し、理数教育の重視を持ち出し、その結果その技術力は様々な分野で世界の最高水準に達していた。つまり、日本の能力主義教育の導入である。

実際、中国では教育現場で能力開発がキーワードとされ、後期中等教育の徹底した複線化や重点学校制度による大学に通じるエリートコースの形成など、優れた人材を重点的に教育するようになった。

この理念を正当化するものとして、「素質教育」が考え出される。「素質教育」は、建前は各人の能力を生かし、人々それぞれが自分の持っている可能性を最大限引き出すものであるはずであるが、中国の「素質教育」は国家プロジェクトとしての人材養成政策と密接に結び付いている。これは、皮肉な見方をすれば、改革開放後の不平等や格差を正当化するものであると言えよう。

能力主義的価値観の出現により、毛沢東が祈念した絶対平等主義は完全に否定されていく。よく働いた者、よく努力した者は、それに見合った収入を得て当然であるという考え方が全国的に普及していった。能力主義は、階層間移動を可能にし、社会主義の理念である完全平等主義の考え方を否定するが、個人の可能性を生かすという人々に希望を与えるものであった。しかし、現実には社会主義国家であるにもかかわらず、教育が富を反映し、貧しい人々の教育はその収入ゆえにより低位に置かれていた。

李春玲によれば、世代間での階層移動がどれだけ難しいかを基準にした場合、3つの構造的障壁が存在しているという。

第1に、政治的資源と経済的資源を持つ階層と持たない階層との間の障壁。党・政府の役人、管理職、私営企業主が「もつ」階層に入り、それ以外が「もたない」階層に入る。

第2に、文化的資源の有無に起因するホワイトカラー的職業とブルーカラー的職業との間の障壁。前者に専門技術職、事務職、零細経営者が、後者に商業・サービス業従業員と労働者、農業労働者がそれぞれ対応する。

第3に、就職口を探すチャンスに恵まれているかどうかの障壁。無職者・失業者・半失業

者は、安定した職業を持つ人々に比べて社会的ネットワークや人的資源に恵まれないため、自らの境遇を改善しにくい状況に置かれている。

李の分析によれば、これら3つの障壁によって階層が分断されているため、一人の人間が一生の内に似た職業の間で移動している場合がほとんどだという。（注13）

第3節 都市部と農村部の教育格差

中国において、都市と農村間の格差は大きく、都市と農村という出生地域の違いが教育格差となって現れ、これが階層格差をいっそう深刻なものにしている。

教育内容については、外国語教育は小学校3年から週2コマと規定されているが、都市部では小学校1年生から英語学習が実施されている学校が多い。一方、農村部では小学校3年からの英語学習がようやく始まりつつあるが、教師が確保できない所では、依然として授業が行われていない。しかしながら、英語は大学受験科目となっているため、農村部からの大学受験は圧倒的に不利である。

備品・設備という点でも、都市部は恵まれており、都市部の小学校ではコンピューターを利用して学習できる環境が整備されている。農村の小学校にも徐々にコンピューターが配置されるようになってきている。しかしながら、コンピューター室には鍵がかかっており、子どもたちが利用しているという姿はあまり見られない。主として教師が利用している学校が多い。

こうした都市と農村における教育格差の要因として、教育予算が不足していることが伺われる。2006年の政府による教育関連予算のGDPに占める割合は、3.0%で世界平均の4.7%を下回っている。

さらに、都市と農村の教育格差を生み出す大きな要因として、都市と農村における教員の格差がある。都市部には、優秀な教員が集まっているが、農村部では条件が劣悪なため教員が安心して仕事に取り組めなかったり、代用教員が多かったりといった問題がある。

1994年に教師法が成立して以降、教員の雇用は一般に学校ごとに教員を募集する形で行われている。教員は、終身雇用制から各学校と契約を結ぶ自由契約制へと移行しつつある。学校の審査に合格すれば、学校と1年から3年の契約が出来る。そのため、条件の良い都市部の学校に教員が殺到している。都市部の小学校と農村部の小学校とでは、勤務する教師の格差は拡大している。多くの農山村では、教員不足が深刻で臨時教員で急場を凌いでいる。

大躍進から文革期にかけて小学校が急増した際、民間教師や代用教員（臨時教員）など、正規の師範教育を受けていない資格外の教員が教育事業を補ってきた歴史があり、文革が終わり民間教師の中で比較的レベルの高い者を公営教師にするなど、民間教師をなくす政策が打ち出されてきたものの、今でも正規の師範教育を受けていない代用教員が教鞭を執っている農村もある。（注14）

第3章 中国の教育実態—教育現場への調査—

筆者は、2011年10月8日から13日にかけて湖南省湘潭市の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の現地調査を行った。湘潭市は、長沙市の近郊の都市であるが、純粋な農村と都市部とが併存している。今回の調査では、農村部と都市部それぞれの学校を訪問することにより、それらの相違を調べた。

a. 農村部の学校



写真1 農村の小学校の校舎



写真2 農村の小学校のコンピューター室

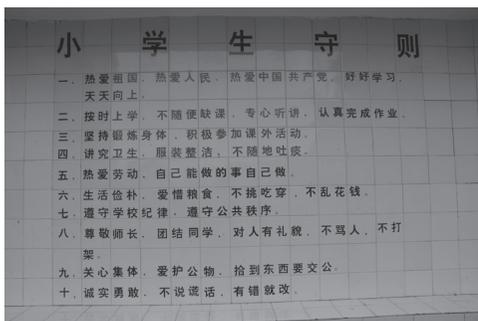


写真3 農村の小学校の小学校心得



写真4 農村の小学校の授業風景



写真5 農村の中学校



写真6 農村の中学校の給食風景



写真7 都市の小学校



写真8 都市の小学校



写真9 都市の中・高校



写真10 都市の中・高校



写真11 都市の中・高校



写真12 都市の中学校の食堂



写真13 都市の幼稚園

写真1、2、3、4は湘潭市郊外紅星村の小学校である。この小学校の児童数は、324人であり、幼稚園児35人、合計369人、教師20人、幼稚園教諭2人、食堂の料理人2人、合計24人である。幼稚園は、1年制で小学校に併設されている。7時20分開門であり、授業は1日6時限あり、1時限 8:30-9:10、2時限 9:20-10:30、3時限 10:40-11:20、4時限 11:30-12:10、5時限 14:10-14:50、6時限 15:00-16:10となっている。午後4時半以降に下校する。国語、算数、理科が中心で、市内に塾はあるが村にはない。しかしながら、出来る子、出来ない子を取り出し、職員室で補習を行っている。

写真3の小学校の心得は、

- 一 祖国を愛する、人民を愛する、中国共産党を愛する。よく勉強して、毎日向上する。
- 二 時間割りの通り登校、勝手に欠席をしない、授業に専心する、練習問題をまじめに完成する。
- 三 体を鍛錬し続け、積極的課外活動に参加する。
- 四 衛生を重んずる、服装をきちんとする。唾を吐かないこと。
- 五 勤勉して、自己で出来ることは自分でやる。
- 六 慎ましい生活をして、食物を大切に、偏食をしない。勝手に金を使わない。
- 七 学校では、ルールを守る、公共秩序も守る。
- 八 先生を尊敬し、クラスメートと団結する。人に礼を心がけ、喧嘩をしない。
- 九 団体を重視し、公共物を守り、拾ったものを公的な機関へ引き渡す。
- 十 誠実、勇敢、嘘をつかない、間違ったことをしたらすぐに改める。

このように、幼稚園児から小学校6年生までの道徳教育を徹底して行っていることがわかる。この小学校では、教師は長年勤務することができ、人事異動も全くなく、また彼らは正規の教員資格を持っている人は比較的少ない。

写真5、写真6は、農村の中学校である。この学校は、3年間で、都市の高校へ進学する。紅星村中学校は、実験学校であり重点中学である。生徒数590人、1クラス50人、1学年4クラス、週5日制である。しかしながら、給食風景でもわかるように立って食事をしており、重点中学であるが農村の中学校の設備が貧弱なことがわかる。この中学校では、半数は就職か職業学校に入り、残り半数は都市の高校に進学する。

写真7、写真8は、都市の小学校である。都市では、小学校に幼稚園が併設されてはおらず、保護者は幼稚園の学齢児を私立の幼稚園に通園させている。給食も農村の小学校のように一律に学校で行うのではなく、希望者は学校で用意するが、多くの小学生は自宅で昼食を摂る。

写真8は、給食時間に校門に迎えに来ている保護者（多くは祖父母）の様子である。この小学校は、1年から6年まで持ち上がりで、1クラス60人、全児童数1,476人である。教職員は、解雇されない。90%以上の先生が師範学校の卒業生であり、女性の若い先生が多かったが、平均月4万円で、一般公務員の80%の給料しか得ていない。

写真9、写真10、写真11は、都市の中学校・高校の様子である。この学校では、都市部

の中学生・高校生と、農村部で中学を卒業した者を受け入れている。生徒の4分の1（500人）は、寮生活を送っており、農村から来た生徒である。中学校卒業生の70%は、普通科に、30%は職業学校へ、高校卒業の98%以上は専門学校以上の学校に入る。1クラス50人であり、教師は180人である。

写真10は、以下のスローガンを書いている生徒の様子である。

生命の価値

人間の価値は、表面的に汚されたものと綺麗なものは同じである。すなわち、表面的なもので人間を判断したいという精神で子どもを教育する。

永遠な座れる指定席

電車に乗る時、多くの人は車両に乗り、その車両の空いた座席を待つ。このように、子ども一人一人の可能性は、座席のたとえ話を例にして、求めることが必要であると教育されている。

生命に葉を描く

ある病気した子は、秋の木を見て、葉が少しずつ落ちていることに気づき、病気の状況も段々悪化してしまう。その木の葉が全て落ちると自分の生命も終わりかなと思う。ある画家は、そういうことが分かった上で、ひとつの絵を描いた。その中で枯れた木に一枚緑の葉を描くことにより、葉は終始落ちなかった。このような西洋のたとえ話を引用することにより、人間の精神的な強さを求める。

写真10は中学校1年から高校3年までの各学年の「登校（遅刻）」「自習」「ルール遵守」「衛生」「体操」を10点満点で曜日毎（毎日）生徒に記述させ、各学年毎に競わせている風景である。

写真11は、毎日（月曜日から金曜日まで）の評価である。1年生から6年生（中学1年から高校3年）までの各項目の評価を10点満点で生徒に黒板に記入させ、各学年毎に競わせている。また、給食も写真12のように独立した食堂があり、各自が調理室から食事を受け取り、食事する。

写真13は、都市の幼稚園である。市内には、100から1000の私立の幼稚園が存在し（実数はなかなか把握出来ない。）、授業料は月1万円、終日保育1万5千円、幼稚園バス3台分であり、比較的経済的余裕のある家庭しか通園させられない。これらの幼稚園は、ハーバード・イングリッシュ（アメリカ英語）を教えることが売りであり、アメリカ型教育をモデルとする教育が中国では一般的であることを典型的に示唆している。

中国では、清朝、中華民国、中華人民共和国と経るにつれて、より多くの人々が教育の機会を得ることが増加している。その中で日本、フランス、ドイツ、ソ連、アメリカといった海外の教育実践を取り入れ、それを自国の教育実践に同化させる努力がなされてきた。中国の人々が表面的に中国独自の教育の固執しているように見えるが、実践面を見る限り文化大革命期を除いて、大胆に日本を含む諸外国のものを積極的に取り入れていることがわかる。

しかしながら、国土が広大なことと、開放改革政策の下で教育格差が大幅に拡大していることがわかる。筆者が調査した湘潭という一地方都市において、車でわずか1時間足らずという距離にも関わらず、格差は歴然としていた。また、高学歴志向で高等教育を受ける若者が増大した半面、中学で学業を断念している若者もかなり存在し、それが就職や社会階層の相違に繋がっていく。小学生、中学生、高校生の勉学への意欲が日本以上である現実から見て、多くの若者の後期中等教育、高等教育への機会拡大が格差の解消に通じることであろう。

〔注〕

- (1) 蔡元培・徐特立、石川啓二・大塚豊訳『中国の近代化と教育』明治図書、1984年、103頁。
- (2) 同上書、103頁。
- (3) 同上書、146-148頁。
- (4) 同上書、190頁。
- (5) 同上書、220頁。
- (6) 同上書、222頁。
- (7) 同上書、193頁。
- (8) 同上書、194頁。
- (9) 同上書、191頁。
- (10) 顧明遠、大塚豊監訳『中国教育の文化的基盤』東信堂、2009年、308頁。
- (11) 同上書、306頁。
- (12) 諏訪哲郎・王智新・斉藤利彦編『沸騰する中国の教育改革』東方書店、2008年、186頁。
- (13) 園田茂人・新保敦子『教育は不平等を克服できるか』岩波書店、2010年、94頁。
- (14) 同上書、136頁。

〔追記〕

本研究は、平成23年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(たなか けいじろう 教育学科)

2012年10月31日受理

